

平成22年4月26日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19401026

研究課題名（和文） 中国浙江省における戦国大名沈没船に関する日・中共同研究

研究課題名（英文） A research of the sunken vessel at East China Sea in 16<sup>th</sup> century

研究代表者

鹿毛 敏夫 (KAGE TOSHIO)

新居浜工業高等専門学校・一般教養科・准教授

研究者番号：60413853

研究代表者の専門分野：日本史

科研費の分科・細目：人文学A・日本史

キーワード：戦国大名、沈没船、国際情報交換、中国

## 1. 研究計画の概要

九州の戦国大名大友氏に関しては、この10年間で考古学的アプローチによる研究成果の蓄積が著しく進歩している。中世400年間にわたり府内（大分市）を本拠に豊後を統治した大友氏の大名館跡や、大名蔵跡、周辺に5000軒あったと記録される町屋跡の総合的発掘が現在も継続されており、14～16世紀の国産土師器や輸入陶磁器、キリスト教関連遺物などが続々と出土している。

特筆されるのは、中国や朝鮮半島、琉球、東南アジア諸国からの陶磁器の出土量の多さと多様さである。九州は、日本列島の端に位置する小島であるが、国境のない中世においては、日本列島の国家秩序に位置づけられるとともに、中国浙江省を中核とする環シナ海域世界の国際秩序の一角を占めていた。

中国の『明世宗実録』によると、嘉靖36（1557）年に大友義鎮は使僧ら40余人を明へ派遣し、対明貿易の公許を申請したことがわかる。記録には「以十月初、至舟山之岑港泊焉」とあり、彼らの「巨舟」が10月初めに浙江省舟山の岑港（舟山島西部の港）に着岸した事実が判明する。大友氏の「巨舟」は翌月まで岑港に停泊して貿易許可を待ったが、折しも倭寇王直と明官軍の軍事騒動に巻き込まれ、岑港の海底に沈没してしまった。

これら文献史料が示す歴史的事実を念頭に、本研究の目的は、①16世紀の舟山岑港の地理的位置を現地比定すること、そして、②1557年に岑港に沈没した大友宗麟の貿易船

の遺物を探索し、その引き揚げの可能性を探ること、また、③船を失った大友氏の遣使一行が新たな船を建造した「柯梅」の位置を現在地で確定させること、の3点に置く。

16世紀のいわゆる世界史における大航海時代は、従来、日本史の分野においては、ヨーロッパ諸国がアジア及び日本に到着し日本国内で西洋の文化や技術が開いたとする、受け身の歴史として認識されがちである。しかしながら、同時期の西国大名は、日本という国の枠を越えた極めて能動的なアジア外交を展開していたのであり、本研究でその能動的な歴史の実態の一端を明らかにし、世界史的レベルでの日本人の活動の具体的様相を歴史的に明証することを目標にかかげる。

## 2. 研究の進捗状況

これまでの研究で得られた成果は以下の6点である。

まず第1は、中国浙江省舟山島の現地調査において、研究の主対象である戦国大名沈没船の時代に関わる考古遺物を確認できたことである。船が沈んだ岑港の16世紀の遺物として、鉄砲弾、大砲弾、権、陶磁器片、その他複数の遺物が確認され、研究を大きく推進することができた。今後、各遺物を詳細に分析するとともに、より幅広く遺構の確認作業を進めていく必要がある。

第2は、船の母港である豊後府内の都市空間構造の解明を進めることができ

たことである。研究協力者との共同作業により、都市中心部の空間構造が段階的に明らかにされ、また、海に面する外港の機能も明確化されてきた。文献史学と考古学の双方の成果を照合させて、より一層の構造解明を進めていく予定である。

第3は、中国の研究者との情報交換を深める体制が一層強化されたことである。これまで現地に近い浙江工商大学、および寧波大学で開催された2つの国際シンポジウムで本研究の趣旨と研究状況を発表した、その成果もあり、同じ研究志向をもつ複数の中国人研究者と情報交換を行うことができた。今後、更に国際的連携を深めて、研究の推進をはかっていきたい。

第4は、日・中共同による本研究の中間成果を、日本語と中国語の双方の言語でまとめて、広く公開することができたことである。日本語では『史学研究』や『海路』等の学術雑誌に「戦国大名領国の国際性と海洋性」「16世紀のBungoと大友宗麟の館」等の成果を発表し、また、中国浙江大学出版社より刊行された『舟山普陀与東亜海域文化交流』に「日本“九州大邦主”大友氏与舟山島」を中国語で発表することができ、中国での現地調査の成果を含めた中間段階での本研究成果をより幅広い中国人研究者に提供することが可能になった。

第5は、東アジアの日中関係史の一側面として収斂しがちの本研究を、西洋史を含めたよりグローバルな世界史の史的構造のなかに位置づけて研究報告することができたことである。ポルトガルのリスボンで開催された国際研究会において本研究の趣旨と中間成果を英文発表したことで、本研究に対する西洋の研究者から様々な意見や評価を得ることができ、最終年度に向けた今後の研究集約の方向性を明確化することができた。

そして第6は、豊後の古代からの要港である佐賀関について、その機能や空間構造を明らかにすることができたことである。佐賀関は、古代の海部の系譜をひく豊後水道の伝統的な港町である。リアス海岸の天然の入り江には、中世には戦国大名大友氏の水軍衆に編成された海民たちが生業を営んでおり、漁労や船を使った物資の輸送活動を行いながら、家臣として大名に奉公する武士たちの存在が複数の史料から確認できた。その成果は、港湾空間高度化環境研究センターHPを利用して一般公開している。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

「2. 研究の進捗状況」に記したように、これまでの研究で、日中両国での現地調査が大きく進展し、また両国研究者の連携体制も強化することができており、研究は当初計画通り順調に進展していると言える。

### 4. 今後の研究の推進方策

上記のように、現在までのところ、本研究は各分野ともに順調に進展しているが、ただこれまでの研究では、海域交流史研究の比較史的考察の推進が遅れているため、今後強化していく必要がある。最終年度には総括成果をまとめる必要があることは言うまでもない。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 鹿毛敏夫、「日本“九州大邦主”大友氏与舟山島」、『舟山普陀与東亜海域文化交流』、153～161頁、2009年、査読有
- ② 鹿毛敏夫、「戦国大名領国の国際性と海洋性」、『史学研究』260、1～17頁、2008年、査読有
- ③ 鹿毛敏夫、「16世紀のBungoと大友宗麟の館」、『海路』5、10～22頁、2007年、査読無

[学会発表] (計4件)

- ① 鹿毛敏夫、「日本“九州大邦主”大友氏与舟山島」、浙江省中日関係史学会、2009年1月10日、中国寧波大学

[図書] (計1件)

- ① 鹿毛敏夫、『戦国大名大友氏と豊後府内』、高志書院、総411頁、2008年